

I - C - 3

機能性不妊症における柴苓湯の意義

医療法人 假野クリニック

○ 假野隆司、古殿正子

【研究目的】 機能性不妊症の不育症因子を調べ、免疫学的不育症因子に対する柴苓湯の有効性を検討すること。

【対象と方法】 5年以上の不妊期間、1年以上の随証漢方療法を含む治療実績を有し、最低3周期は各種不妊因子に異常がなかった37例の染色体（夫婦）・HLA抗原（夫婦）・抗核抗体・抗DNA抗体・抗cardiolipine IgM抗体を調べた。HLA class II抗原を2個以上 sharing例には夫リンパ球移植、無効・流産例には柴苓湯併用療法を、HLA-DR4抗原保有例・抗核抗体・抗cardiolipine IgM抗体陽性例、HLA sharing・自己抗体陽性の重複例には柴苓湯（ツムラ、9.0g/day）療法を行なった。

【結 果】 染色体では転座が2例(5.4%)、HLA class II抗原のsharingは3個以上が37.8%、2個が39.7%に認められた。DR4抗原保有率は29.7%、抗核抗体陽性率は16.2%、抗cardiolipine IgM抗体陽性率は18.9%であった。各因子の重複は51.3%と過半数を占め、HLA sharingと自己抗体陽性の重複が多かった。不育症因子を有しないのはわずか16.2%であった。生児獲得率でみた治療成績はリンパ球移植(8.6%)、リンパ球移植・柴苓湯併用(13.0%)、柴苓湯単独(17.4%)であった。DR4抗原保有は27.3%、抗核抗体陽性は50.0%、抗cardiolipine IgM抗体陽性は28.6%、流産例は全てHLA sharingを重複していた。

【結 論】 1) 機能性不妊症の主因は着床に関わる生殖免疫学的異常であり、自己免疫異常と同種免疫異常が合併が高率なことが特徴である。2) 柴苓湯は自己免疫異常のみならず同種免疫異常にも有効である。3) 同種免疫異常と自己免疫異常の合併例については現状では柴苓湯療法が唯一の治療法である。